

## 成果報告書

### ●インターン場所

JICA フィジー在外事務所 21日間

### ●インターン目的

大洋州における日本の国際協力の理解と、広報媒体の作成

### ●インターン日程

10日 所長とのお話。安全管理、JICA プロジェクト概要、保健プロジェクト、防災プロジェクト、ボランティア事業に関するブリーフィング。

11日 国内便でナンディ・ラウトカに出張。JICA プロジェクトの廃棄物処理場、浄水場、気象局を見学

12日 スバの上水プロジェクト、地震観測所見学

13日～15日 村でのホームステイ

16日 石原環境大臣スバ視察の手伝い。

17日～ オフィスで JICA のフィジーでの過去案件一覧リスト作成。パンフレット草案作成

20日 帰国する海外青年協力隊・シニアボランティアの帰国報告会。

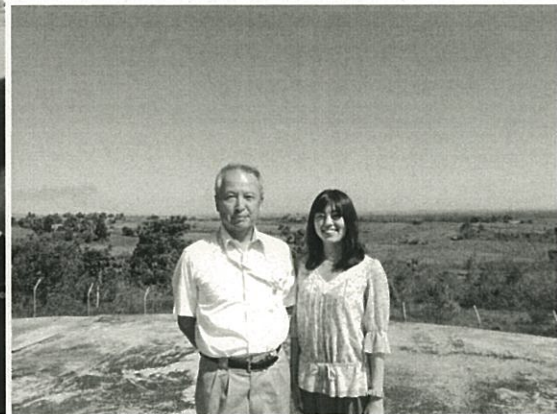
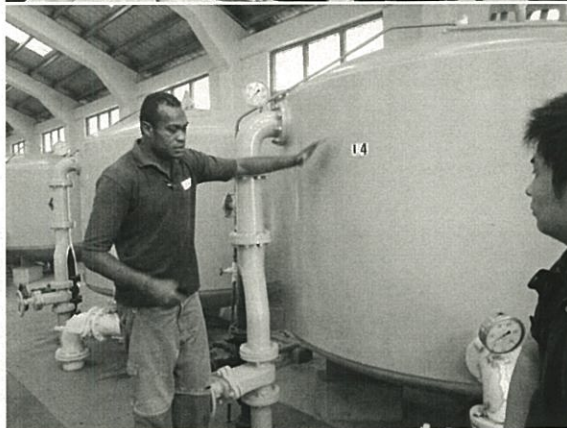
24日 OISCA インターン生と共に、スバ市役所訪問、南太平洋大学訪問。

### ●プロジェクトサイト視察

JICA の支援には、技術協力プロジェクト、有償支援協力、無償支援協力の三種類がある。JICA の事務所はスバにあるが、国内便でナンディ・ラウトカに出張し、JICA のプロジェクトサイトを実際に見学に行かせていただいた。有償資金協力で建設された上水場、技術支援協力プログラムで作られた廃棄物処理場、無償資金効力で建設された気象局を訪問した。

### ○ナンディラウトカ地域上水場見学

1998年のナンディ・ラウトカ地域上水場整備事業というプロジェクトで建設された上水場を視察した。この案件は有償資金協力であるため、1998年2月から日本がフィジーに対して貸付を開始し、2004年4月に貸付を完了した。現在は返済期間中で、毎月滞りなく返済が行われている。またこの案件は、フィジーに対する支援の中で唯一の有償案件であり、他は全て無償か技術協力プロジェクトである。



ナンディ・ラウトカ上水場では、現在 JICA シニアボランティアの A さんが活動しており、その方とフィジー人の二人が私達を案内して下さいました。

東京では水を地域に届ける際ポンプで押して送水しているが、ナンディでは、自然の土地の高低差と、上から下には水は流れるということを利用して送水している。土地の傾斜がちょうど良く上から下になだらかに水が流れる地域では、蛇口をひねると水が出る。しかし、傾斜が強い所では、水がパイプ内を流れる速度が速くなり、水圧があがり、パイプが破裂してしまう。また傾斜がゆるすぎると逆に水圧が弱くなり、蛇口をひねっても水が出なくなる。水道事業会社を退職した A さんは、破裂したパイプをなおす技術をフィジー人に伝えたり、自然の土地の高低差を利用しながらも全ての家庭の蛇口から水が出るようにする計画をフィジー人と実行している。

A さんと上水場で働くフィジー人とのやりとりを見たり、そのフィジー人が「A さんは素晴らしい技術と知識を有していて、そんな人と一緒に働けて沢山の事を教えてもらうことができ、自分は本当に本当に幸せだ」と言っているのを聞いて、そこにまさに理想の国際協力の形を見たと思った。一人の日本人が誰も知らない所で、こんなに素晴らしい形で国際協力に貢献しているという事実に大変感銘を受けた。フィジー人にこんなに感謝されて、伝える専門的技術と知識を持っていることをとてもうらやましく思った。JICA のボラ



ンティア事業は、ただお金をあげたり建物を建設するだけでは不可能な、人と人との繋がりを大切にする素晴らしい国際協力場の場を提供していると感じた。

#### ○廃棄物処理場見学

2006年～2012年の廃棄物減量化・資源化促進プロジェクト（技術協力プロジェクト）で JICA はラウトカ、ナンディに対し、重量計（最終処分場トラックスケール）、多機能トラック（ごみ収集車）、添削機等を供与した。また廃棄物処理に関する専門家が現地に入り、ラウトカ、ナンディのごみ収集をいかに行うか、收拾したごみを処理場の中でどう計画的に処理していくかということをフィジー人に伝えた。2011年～2016年までは大洋州地域廃棄物管理改善支援プロジェクト（J-PRISM）という技術協力プロジェクトが進められている。



廃棄物をのせたトラックが処理場にやってくると、そのままトラックは JICA が提供した重量計の上ののる（写真2枚目）。重量計の横にある小屋の中にはパソコンがあり、エクセルで全てのごみの量が管理されている（写真3枚目）。このパソコンに、よく来るごみ収集トラックの重さが登録されており、重量計にのることで、何 kg のごみを運んできたか自動的にわかるようになっている。収集してきたごみの量に応じてお金が支払われる。

ゴミの量を減らすために、自宅でのコンポスト（肥料）の推進にも取り組んでいる。写

真4枚目がコンポストビンであり、この中に生ごみを入れると肥料になる。フィジー人の多くが家庭菜園をしており、肥料は家庭で大変有効に活用できる。

ここでも廃棄物処理場で働くフィジー人が処理場のシステムについて説明してくれた。フィジー人は「我々の能力の範囲内でマネージメントできるシンプルなシステムでやっている」と言っていた。自分たちの能力と、廃棄物処理場のシステムをフィジー自身が良く理解し、現在はフィジー人だけで運営でき、それがうまく機能している点で、開発援助プロジェクトの成功例だと思った。

大学院では、前期に開発援助プロジェクトの問題点を勉強した。その中で、途上国現地の人にプロジェクトを最終的に引き継ぐことができないという例を見た。プロジェクト期間が終了してしまっていて援助側が手を引いてしまうと、被援助側の能力だけでそのプロジェクトを実行し続けていくことができないのだ。これまでの勉強では、開発プロジェクトの失敗例や問題点ばかりに目がいっていたので、実際にプロジェクトの成功を見たのはとても驚いたし、大変勉強になった。

#### ○気象局見学

1995年～1996年に渡って気象観測・予報設備整備計画という無償資金協力プロジェクトが行われ、気象観測所が建設された。フィジーをはじめとする大洋州の島嶼国は、サイクロンや台風などの被害にあいやすいため、防災対策のためにも、起床観測・予報は大変重要である。気象局建設後は、気象観測・予報設備整備計画フォローアップ協力プロジェクト、気象予警報能力強化及びネットワーク作りプロジェクト、大洋州地域気象分野第三国研修プロジェクト、広域防災システム整備計画といったプロジェクトを通じて、主に気象予報の人材育成に対する支援を続けてきた。現在は大洋州地域気象観測能力強化プロジェクトが進行中である。

